

私たちは誰を愛するのか―生命倫理におけるキリスト教的視点―

土井 健司

生命倫理学者の香川知晶によると、医療人類学者の山崎吾郎は脳死・臓器移植の場について臓器提供を申し出た家族の意識調査をした結果、脳死・臓器移植において論点となった「脳死は人の死かどうか」といったことがほとんど問題とされていなかったことを報告した。ひとたび法律として成立してしまえば、本来の問題点はスキップされ、問題化しなくなる。とは言え問題が解決されたわけではない。山崎はこうした事態を目の当たりにし、「知識のパッケージ化」という言葉を編み出した。例えば脳死について様々な事柄が全部まとめてパッケージ化され、一を知るだけでその他の問題をもはや考えなくともよいとする現象である。生命倫理の場でのような「知識のパッケージ化」が起こり、思考停止が蔓延しているという。香川もこの点を突き、正面から問題に取り組む必要を述べていた。とは言え、これは何も生命倫理の場に限らない。様々な領域で思考停止、あるいはある程度以上考えなくてもよいとする現象が見られるように思う。

とは言え他方、高校の学習課程でさまざまに「考える」試みがなされている。おもしろいのは英語の教科書である。生命倫理学者の大谷いづみによると、ある英語の教科書には次のような設問があるという。一二〇歳まで生かすことのできる生命維持装置ができた未来世界で、ある老夫婦が一〇五歳になる夫の母の生命維持装置を外すかどうかを悩んだ挙句、経済的な理由から外してしまう。このようなリード文を読まされ、設問でこの決断をした老夫婦を慰める英文を書くことが求められるのである。

私が勤める関西学院はキリスト教系の大学だが、関西学院高等部において倫理を教える古田晴彦教諭は『高校生のための「いのち」の授業』という文庫を著している。テーマの多様性、わかりやすい解説、自分で考えるための白紙ページが特徴的な良書だと言える。とくに白紙ページは大抵テーマのはじめにあつて、まず高校生にテーマについての意見を書かせ、そのうえで解説をしてさらに考えさせるという構造になっている。授業は生ものであつて、実際の授業での使い方は別なのだろうが、本だけを見ると、どのタイミングで考えさせるのがよいのか、また何のために考えさせるのか、その目的意識について検討の余地が残るように思える。また散見されるキリスト教的価値観、例えば友のために命を捨てることを高評価する聖句なども見られるが、宗教的視点から各テーマをどのように考えるのか、あるいはどのように考えるのが宗教的かは検討しておく必要がある。

私は、大学で「応用倫理とキリスト教B」を担当するが、毎回生命倫理の議論において「キリスト教」とは何かを問題とする。宗教者が発言すればすべて宗教的であるわけではないからである。さらに「知識のパッケージ化」が進む現代社会のなかで生命倫理の問題はブラックボックス化し、よく考えられないまま決定がなされてしまう。その中で「考える」訓練の必要を感じる。宗教はときに極端な意見を述べるのでそのナイーブに慎重でなければならぬが、二点ここで重要と思われるものを指摘したい。一、そもそも生命倫理は、医療の場にあつて忘却された存在―例えば人体実験における被験者、妊娠中絶における胎児あるいは母、脳死・臓器移植における脳死者等―に人間としての眼差しを回復することが根本であつた。イエスの説く福音の基本のひとつは、社会の中で見えなくなった存在、分からなくなった者（しばしば「貧者」と言われる）に目を向けさせることにあり、この点を「考える」よう促す必要がある。二、たとえ「愛」という宗教的価値が語られるが、パッケージ化された愛ではなく、「愛」とは何か、果たして臓器提供は愛であるのかを含め、「誰を」愛するのかを考えねばならない。